
ボディレンタル

愁焔 飛翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボディレンタル

【Nコード】

N2877A

【作者名】

愁焔 飛翠

【あらすじ】

この小説の展開を見て、あらすじをつけようと思います。

1 : Encounter

俺が、自分じゃ無くなったのは何時だろうか……。

全てはあの日。

近くの街に遊びに行った帰り道だった。

「おい！その奴！」

と突然呼び止められた。

「俺か？」

と自分を指差した。

「そうだ。ちよつといいか？」

「ああ、いいけど……。」

「ちよつと、頼みたいことがあるんだが……いいか？」

「いいぜ。」

「ちよつと来てくれ。」

と言って男は歩き出した。

黒のタンクトップと縦ストライプのズボンを履く俺と黄色の半袖のシャツの袖を肩までめくり上げた男。

まるで、兄弟のような感じがした。

「行こうぜ。」

「ああ。」

空が水色からあかね色まで、綺麗なグラデーションだった。
忍び寄る夏の闇とグラデーションが交じりあい、いい具合いな黒さ
を出していた。

「名前、何ていうんだ？」

と俺は聞いた。

「俺か？俺は水野 武之。高1だ。ってかお前は？」

「俺は桜井 卓哉。高2だ。」

「先輩か……。二吹高？」

「そう。二吹高校。」

「何だ、おな高か。」

と武之を先頭に後をついていくように俺は歩いた。

「お前、いい体つきだな。」
と言った。

「そりゃ、毎日筋トレやってるからな。」

「なあ、俺は一応先輩だから、敬語くらい使えよ。」

「あつ、すみません。」

暫く歩いた。

人気のない、山中に来た。

「なあ、頼みって何だよ。」

と俺は武之に尋ねた。

「卓哉、お前の肉体を貸してくれ。」

「はあ？何言ってるんだ？」

「お前の肉体はさぞ入り心地が良いだろう。お前は俺の体になるんだ。」

「ははは。やってみろよ。」

俺は、右腕に違和感を感じた。……シユツ!!!

傷口から新鮮な赤の血が流れた。

「ふはは、俺の全ての細胞が、お前の感覚に成りたく疼いてるぞ。」

武之の手が破けて、細い紐が出て来た。

何干にもなる武之の手を作っていた紐が俺の傷口に刺さり手に向かい入り込んできた。

何千もなる紐は俺の筋肉の繊維に交ざった。

・・・ボコボコボコ

もう武之には左腕がない。

なぜなら、彼の左腕は俺の右腕になったから。

「案ずるな。全てお前のままだ。声も記憶も全てな。」

「ぐわあ・・・。はあはあ。」

「俺は、お前と精神融合するんだ。だから有り難く思いな。俺のこの能力がお前も使えるんだぜ。性行為より快樂だぜ。」

「俺は・・・。。。」

「痛いああ？そりゃ痛いだろうな。ハハハ、それじゃ、和らげてやるよ。」

武之は飛んだ。そして何十万もある紐は一気に俺の傷口に入って行った。

「ぐわあああああ！！！！」

と叫んで倒れた。

3 : Parasitism

「……ははははは。いいぞ。気に入ったぞ。」

武之は俺の手を広げた。

指先が割れ、あの武之の紐が顔を覗かせていた。

「さ、卓哉に変わるか。」

武之は目を閉じた。

「……んっ……。」

俺は目を開ける。

身体のいたる所が軋んでいる。

……ピキッ

俺の腕に亀裂が入った。

腕の皮が割れ大量の紐が出て来た。そして、紐は人型を作った。

あの、武之の顔を。

「どうした？そんな驚いた顔をして？」

「お前は誰なんだよ。」

「俺は人間じゃねえよ。寄生虫だ。ははは。俺はな、生きる為に武之に寄生したのさ。お前と同じやり方だな。」

「……消える貴様！」

「案ずるな。俺は直に消えるさ。お前の精神と合体したらな。」

「……………ぐつ。」

「離れろつたて、乗り移つたんじゃなく融合したんだから無理だぞ。」

「感じるだろ？お前の肉体が獲物を欲しがってるのを。俺が、お前の額に触手を刺すと完成なんだよ。お前の精神と俺の精神が合体してな。」

次の瞬間、触手を額に刺した。一気に武之、いや寄生虫の感情が流れてきた。

「うわあああああ！！！！」

俺はニヤリと笑った。

「…………ボディレンタル契約完了…………。」
小さく呟いた。

グラデーションが黒と赤になり、木が赤く染まる。

烏がカアカア鳴いている。

山の丘には両手を腰に当て、

回りの景色を眺めながら妖しい微笑みをする卓哉の姿しかなかった。

4 : Corporal pleasure

俺は帰路に着いた。

風が俺を包み込む。

暖かい風が腕を包み込み、身体を駆け巡る。

まるで裸でいる気分だ。

「おい、卓哉！」

「なんだ諒か。何だ？」

「ってか卓哉、お前タンクトップ似合うな。やっぱり、タンクトップを着こなすにはお前ほどの身体にならないとダメなんだなあ。」
「いやー、ホントかつこいいな。」

「諒もファッションセンスあるじゃん。自分の身体を生かした洋服にしなきゃな。」

「ああ、そうだな。」

「じゃあ、俺は帰る。」

「おう！明日学校だな。」

「こいつ、皆からの信頼が厚いから、どんどん寄生できる。楽しみだな。」

しばらくして家に着いた。

いつもの筋トレを終えた男らしい汗とそれを拭うタオルを首からかけた俺自信に惚れた。

風呂に入り、改めて卓哉の身体を見た。

腹筋といい、二の腕といい、足といい、細長く、いい具合に筋肉がついていた。

自分の胸に指を当てる。

指から出た無数の紐が腹部をなぞりる。

性行為に似た快樂が襲った。

「はああ・・・うわああ。」
と声を漏らす。

風呂から上がり、寢床についた。布団の中で奇妙な感じがした。

・・・俺の身体が次の獲物を求めている。女に移して欲しいと寄生虫が疼いている。

その時、目に一人の女が写った。優しく、人気もあり、スポーツは出来ないが、女らしい一人の女。

「よおし。決めた。次はお前の身体を借りるぞ。」
ニヤリと笑い、寝た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2877a/>

ボディレンタル

2011年2月2日04時47分発行